

平成18年度 伊賀市人権作品 市長賞

市では、市民の皆さんの人権問題に対する関心を深め、人権意識の高揚を図ることを目的として人権作品（作文・ポスター・標語）を募集し、応募総数15,964点の中から、市長賞、優秀賞、入選作品が選ばれました。

11月7日、平成18年度人権作品市長賞授賞式が市役所秘書課応接室で行われ、今岡市長から受賞者一人ひとりに表彰状が手渡されました。市長は「一人でもたくさんの人に人権の大切さを広げていただくという役目をみなさんをお願いしたい」と話しました。市長賞を受賞された皆さんの作品を紹介します。



うつみ かな
内海 果英 さん

(河合小学校4年)

「賞をもらって、すごくうれしかったです」
「わたしの絵をたくさんの人に
見てもらえたらいいなと思
いました」



ポスター

はやし おりな
林 織奈 さん

(青山中学校2年)

「外見も性格も一人ひとり違う
けど、命の重さだけはみんな
変わりません。それは人間だ
けでなく動物も同じです。そ
んなことを感じとってくれる
とうれしいです」



標語

他人事 見えない差別 そこにある

おくたに しょうご
奥谷 昌悟 さん

(大山田中学校2年)

「受賞したことにとても驚きま
した。受賞を機会にこれから
も深く人権について考えてい
きたいと思います」



その言葉 自分に向かって 言えますか?

かわせ たかひさ
川瀬 孝尚 さん

(上野東小学校5年)

「市長賞に選ばれてとてもうれ
しいです。人が傷つく言葉を、
僕たちの身の回りからなくし
ていきたいです」



作文

すぎのたいし 杉野 泰史 さん

(依那古小学校6年)



仲間ととももに

「自分が選ばれるとは思っていなかったからすごくうれしかった」 「まだ差別はなくなっていないから、差別をなくす仲間を増やしていきたい」

ぼくは、毎週金曜日、地区学習会に参加しています。地区学習会では、人権学習をしたり、仲間作りのために共同学習でいろいろな活動をしたりにしています。

ぼくは、4年生のとき、人権学習で、部落差別という差別の問題があることを知りましました。最初、ぼくが聞いたときは、あまりよく分からず、「部落差別って何。」と質問しました。地区に対する差別と先生が教えてくれました。ぼくは、その時、部落差別は、みんなで話し合いをすれば、解決できるかなと思いましたが。

そこには、ぼくの母が職場で聞いた部落差別のことが書かれていました。その中で、ぼくは下郡を差別する人がいるというのを知りました。ぼくは「何で、そんなのおかしい。」と思いました。だって、ぼくは下郡に住んでいるけど、とてもいい所です。4年生のとき、下郡の桜並木の勉強をクラスのみんなでしました。そのときに、下郡のおじいさんやおばあさんが、下郡がみんなからきれいなところだと言われるように、自分たちの子どもや孫が下郡をずっと好きでいてくれるように、そんな願いで桜の木を植えた」と話してくれました。なかなか植える許可が下りなかったけど何度も頼みに行ったそう

です。桜並木には、毎年とてもきれいな花が咲きます。ぼくは、そんな下郡が大好きです。

ぼくは、何が原因でそんな部落差別が生まれたのか、分かりませんでした。先生は、「差別するのに、理由なんてない、だからこそおかしいや。」と話してくれました。ぼくもそう思いました。ぼくはその時は、これから差別がなくなるか、なくなるのに分かりませんでした。それに自分が何をしたらいいのかわかりませんでした。

母は、また最近知り合いの人が部落差別をするのを聞いたけど、その時も、おかしいと思いつつも、「それおかしいよ。」と言いつつ返さなかったそうです。そして、「やっぱり部落差別は今もある。」と話してくれました。ぼくも、そんなのおかしいと思つたけど、やっぱりぼくも、一人では言い返せないかなと思つた。だから、ぼくは、もつといつしよに考えていつてくれる仲間がほしいと思つた。

今は、地区学習会でいつしよに人権学習をしている仲間が6人います。4年生の時

までは、先生を合わせて3人で人権学習をしていました。でも、5年生の時仲間を増やそうと、クラスのみんなに、ぼくたちの思いを発信しました。なぜ仲間を増やしたいのか、いつしよに何をしたいのかをみんなに伝えました。「下郡を差別する人がいる。ぜつたいおかしい。みんなできつしよに考えていつてほしい。」「自分たちもいろんな人権の問題をもつと勉強していかなくあかん。みんなもいつしよにできいこう。」と呼びかけました。

みんな真剣に考えてくれて、その結果、3人の仲間ができました。もちろん他のみんなも、地区学習会には来ていなくても、一生けんめい考えて、いつぱい意見を返してくれました。ぼくは、たくさん仲間とつながることができて、すごくうれしかったです。

もしぼくが一人で、差別をする人に出会つても、「それおかしいよ。」と言うことができるか、すごく心配でした。でも、仲間があると、立ち向かっていけます。だから、すごく仲間は大切だと思つています。人権学習を6年間やって

きて、一番ぼくが変わつたことは、仲間を増やしたい、仲間を大切にしたいと思うようになったことです。地区学習会での人権学習や、出会った人の話、みんなで話し合った学級会などから、やっぱり仲間がすごく大切だということが伝わってきました。

「正しいことを知らないから差別をしてしまう。」と母は、ぼくに話してくれました。だから、ぼくは、これからは人権について勉強して、一人でもおかしいことには「おかしい。」と言いつていけるようになっていきたいです。もし下郡を差別する人に出会つたら、ぼくは、「ぼくを見て。」「下郡に来て。」と自信を持って言つていきたいです。



「市長から頂いた表彰状です」

作文

ともみ 智美さん
小殿 (霊峰中学校3年)



「私の家族は、一人ひとりのことを思いやり、助け合っていて、いろんな問題を乗り越えています。受賞をみんな喜んでいます。家族のことなどを考えるきっかけにしてください」

たった一人の弟

私には、今小学校6年生の弟が一人います。弟は知的障害という発達障害をもっています。

私がその事を知ったのは、私がまだ小学生の頃だったと思います。保育園にいた頃は、まだ何も理解していませんでした。小学生になって、いろいろな人権学習をしていくうちに「知的障害」という言葉に出会い、そして弟がその障害をもっているということを知りました。また、障害をもっている人に対して、差別があることを知りました。私はその障がい者差別がとて身近なものに感じました。そして、私自身も知らないうちに人を傷つけていることに気付きました。それは、ある聞き取り学習の時の

ことです。話をされた人が「障がい者と呼ばれると傷つく。」と言った時のことでした。私は「ドキッ。」としました。私は無意識のうちに障害をもっているすべての人を「障がい者」と言っていました。私は反省しました。知らないうちに人を傷つけてしまっていました。弟を傷つけていることにもなるのだと思いました。しかし毎日、弟と接している私は「障害」って一体何なのだろうと考えてしまいます。

また、話をされた人が「はじめ」についても語ってくれました。本当に腹が立ちました。けれども、今まで見て見ぬふりをしてきた自分にはもともと腹が立ちました。私は「もしかしたら弟がはじめにあっている

かもしれない。」と思いました。障害者差別をしてはいけないと思うけれど、障害をもっていない人と全く同じ生活をおくことは難しいことです。少なくとも弟にとっては簡単ではありません。いろいろな手助けが必要です。そのことで、弟が差別されるのはおかしいことです。誰でも他人の手助けなしでは生活できないのは、あたり前のことなのです。そのことを障害をもっている人の場合は特別に思われるというのは本当におかしいことです。

私が弟に勉強を教えている時、弟は私の言葉を理解してくれません。私が教えてもらった教え方だと、弟は理解することができなかつたのです。また、その時は理解していても、日にちがたつてしまうとすぐに忘れてしまうのです。弟は二つのことを理解するのに、とても時間がかかりました。私は「これが知的障害なんだ。」と改めて感じました。何回教えてもすぐに忘れてしまう、だから、同じ年の子と同じような生活や勉強をするのは逆に弟を苦しめることになるのではなにか、と私は考えます。しかし、私は弟のできる範囲でいろいろなことに挑戦させてあげたいと

思っています。弟が5年生の時、弟の冬休みの宿題でリコーダーの親は「もう、やらなくて良い。」と言っていました。弟が弟にリコーダーを持たせました。弟は楽譜が読めませんでした。教えても興味がなかったのか、全く覚えてくれませんでした。しかし、わたしがその曲を吹くと弟も指を見ながら頑張つて吹こうとしていました。だから私は楽譜を見ないで、指と音とリズムで教えることにしました。毎日、教えることは忘れてしまひの繰り返しでした。本番で成功したのか失敗したのかも、分かりません。しかし、一生懸命頑張つて練習していた弟を思い出すと、とても嬉しく感じます。

私は時々、弟が本当に障害をもっているのかと不思議に思うことがあります。最近では家の手伝いを積極的にするようになり、難しい漢字も読めるようになっていきます。前よりも確実にいろいろな言葉を覚えて、それを使っています。どこに障害があるのだろうと思っていた日、検査がありました。母から聞くと、弟は12歳だけれど精神年齢は、まだ4歳だそうです。正直それを聞いた

時は驚きました。それと同時に不思議な気持ちになりました。言葉では伝えることのできない不思議な気持ちでした。弟は検査の上ではまだ4歳なのかもしれないけれど、私が教えた勉強やリコーダーを頑張つて練習したり、理解しようとしてくれた姿は、誰にも負けない立派な12歳だと思つたからです。弟は弟のできることを頑張つている12歳です。私が弟に教えているだけでなく弟が私に教えてくれることもたくさんあります。

私が差別的に興味を持ち、積極的に学習できたのも弟がいたからだだと思います。私にたくさんの感情を与えてくれました。これは共に生活しなければ分からない感覚なのかも知りません。検査などで、「こうだ」と判断されても、それだけでは分からないものがあると思います。弟がどんな障害をもっているか、いなくても弟は私のたった一人の大切な弟です。時々喧嘩もするけれど、それは姉弟という証だと思えます。私は弟の姉であることを誇りに思います。